

研究結果報告書

「言語機能」を重要視した日中間の発話行為の比較研究

所属：上海電力学院 外国語学院 日本語学部

役職：教授

氏名：文 鐘蓮

グローバル化の進展は日増しに激しくなっており、そのわたる分野は経済や政治だけではなく、数多くの人的な分野にも及ぶようになってきた。このような情勢は更に多言語・多文化社会共生への必要性を強くしており、共生や相互理解を深めることは避けては通れない課題となっている。人間同士が如何にして他人とのコミュニケーションを成立させているのかという発話行為をめぐって語用論、言語行為の研究、談話や会話分析といった多角的な観点から様々な研究が現れてきた。人間のコミュニケーション運用能力というのは、文法的な言語知識だけでは不十分であり、様々な目的や場面、社会的要素に適応した言語運用能力の重要性が主張されてきた。Austin(1962)やSearle(1969)の発話意図と意味との研究、言語形式と機能との研究、言語使用の背後にあるメカニズム解明などの研究によって新たな研究が展開されるようになった。

Goffman(1976)は、潜在的に危害を与える行為は「弁明」(Accounts)と「詫び」(Apologies)行為によって修復されうると指摘している。各々の言語表現にはその言語を使用している社会・文化に好まれている独特な表現があり、その社会固有の人間関係の捉え方や相手への配慮の仕方がある。日本と中国は異なった地理的環境及びその政治的体制や文化的背景のもとで、各自独特の言語文化を作り上げてきたため、両言語の発話行為をめぐる言語表現の丁寧さ(Politeness)の特徴及び基準は異なるはずである。

本研究では対照語用論的な視点から談話完成テスト(Discourse Completion Test)とロールプレイ(role-play)の研究法を用いて日本人母語話者(NNS)と中国人母語話者(CCS)の大学生を被験者として、異なる人間関係、状況、場で現れる<弁明>と<詫び>の発話行為に対して調査を行い、「関係修復作業」(Remedial Work)の発話行為を成立させるための認知的過程で使われる両言語の語彙・文体及び丁寧さ(Politeness)のストラテジー使用に焦点を当てて研究を行い、以下のような文化的な特徴と異同を明らかにした。

① 日本人の言語行動ににおいて、{弁明}と{詫び}は欠かせない表現であるのに対し、中国語には日本語に見られない「弁明の多用現象」が生じており、{詫び}の言語表現は日本語ほど使用されていない結果がみられた。

② 日中両言語ともに言語表現の結果を左右する重要な要素は言語表現が運用される際の発話の場面、話し手と聞き手との間の上下関係、力関係などといった条件であり、そのような条件によって発話される言語表現は異なるはずであるが、中国語のほうが日本語より遥かに上下、親疎、力関係などといった要素に敏感に反応していることがはっきりした。

研究成果の公表について

口頭発表 （題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

「関係修復 (Remedial-Work) の発話ストラテジーにおける日中対照研究」、
文鐘蓮、2015年度東アジア日本語教育・日本文化研究学会国際学術大会、20
15年8月22日、日本西南学院大学

論文 （題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

論文「関係修復 (Remedial-Work) の発話ストラテジーにおける日中対照研究」
文鐘蓮、『中国研究』（日本の出版物、2016年12月出版）

書籍 （題名・著者名・出版社・発行時期等）